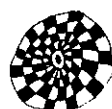


創生

目次



《秋》

第三十七卷第三号通卷百四十七号

嘶馬集「伝馬船」	山口 美智	2
「水の国」	屋内 修一	4
「青蜥蜴」	石井 九峰	5
「浮いてこい」	菅 風花	6
「雨の木」	米田由美子	7
虹座	水田 満里他	8
百花漫步「嘶馬集・虹座欄鑑賞」	松本 直美	16
詠花吟月「可惜夜」	藤坂 香子	17
「黒揚羽」	渡邊 午水	17
七夕	平野 幸輝他	18
共鳴句「七夕欄」	山口 美智	26
花菜	岡田 玲子他	27
共鳴句「花菜欄」	山口 美智	37
夏号鑑賞「嘶馬集」	池田 萩邨	38
夏号鑑賞「虹座欄」	加納 千女	39
夏号鑑賞「七夕欄」	瀬崎 栄子	40
夏号鑑賞「花菜欄」	櫻田 文雄	41
添削教室	上重木はるひ	42

第147回課題句（沙羅の花）

中村 智子

43

七夕忌法要と吟行句会

松田 朗子

46

第六十回平和祈念俳句大会

高垣 わこ

48

平和宣言

松井 一寅

49

私の好きな秋の季語

隠木登美子

50

をちこち

片山 妙重

50

天穹「夏の大会」

松本 直美

51

太田川例会秀句評

山口 美智他

52

表紙

①松野自得
柿をむく指のさきにもある母情

②馬洗俳句

③お知らせ

④阿響・課題句募集

カット

野間しげる

伝馬船

山口美智

流れ藻の杭に集まる広島忌

延命の水を六腑に原爆忌

島の子ののけぞって漕ぐ伝馬船

嘶馬集

船の名は子供の名前雲の峰

真四角の鉢に疲れし熱帯魚

厄介なものに文法大夕立

少しづつ狂ふ季節や藪からし

庭畑の地生えの冬瓜持て余し

嘶馬集

水の国

屋内修一

校倉の経蔵抜くる若葉風
邂逅の式部の硯堂涼し
植田照る近江はまこと水の国
歌かなづ青葦渡る湖の風
今年竹玄関脇に代を継ぐ
薫風や子等うち揃ふ上寿の賀
俳句てふ暮しの杖や梅雨籠り

嘶馬集

青
蜥
蜴

石井九峰

橋多き平和の都水温む
笑顔なき役所の吏員ヒヤシンス
こでまりや水路やうやく水の満ち
しばらくは思ひ出を着る更衣
庭石に遊ぶ家の子青蜥蜴
停まるたび薫風を乗せデューゼルカー
あめんぼの足もて水面磨きけり

嘶馬集

浮いてこい

菅 風花

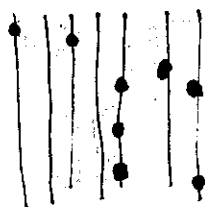
美容師は今日も饒舌夏立つ日
風見鶏の海に向きゐる街薄暑
のんびりが夫の本分走り梅雨
熊野筆のふはりと頬に梅雨入かな
戦艦の小さき丸窓卯波立つ
宣言は「悠々自適」浮いてこい
平家里は母の故郷てんとむし

嘶馬集

雨の木

米田 由美子

更衣少し邪魔なるナフタリン
歩板揺らぐを枇杷の袋掛
池の面の静けき余白花菖蒲
この道が好き梔子の香に佇ちぬ
雨の木にくぐもる鳥語半夏生
知らぬ路地曲がれば戸戸に濃紫陽花
梅雨や憂し壁に手のあと画鋏あと



虹座

—— 同人・五十音順送り ——

山口 美智 選

※おたまじやくし纏れて離れまた纏れ
辿り来てすでに花なる路の臺
足音を聞くや浮き出る目高たち
のれん生地替へて立夏の風通る
初蜩ライン仲間の里便り

水田 満里

山口 田

8

友去りてぶらんこの揺れ続きをり
青鷺の干潟に一羽立ち尽くす
精いつばい指を開きて守宮の子
コンビニも昔は海や風薫る
梅干を竹皮に入れけんけんば

宮地 瑞穂

瀬戸田

※うららかや乳呑み児己が足を愛で
春泥てふ勲章つけて甲子園
それぞれが己が色ふき木の芽山
霧や奥に楼蘭あるがごと
田圃道一年生をしんがりに

守田 高生

太田川

山口 ひろ女

太田川

焼き鮎の鰭美しき茶懷石
 *父の日の父の居場所の定まらず
 捨てきれぬネクタイ父の日の証
 小判草揺るる団地や高齢化
 この町に教会ひとつ沙羅の花

山崎 華園

太田川

おうおうと馬洗師の声春惜しむ
 庭の木々ひと夜の雨に夏めけり
 平家社宅のみんな仲良し昭和の日
 一品は白磁の皿に今朝の夏
 山も田も渾然一体さつき雨

荒木 正夫

宗像

薫風や森の微かな息づかひ
 米騒動の真つ只中や梅雨に入る
 青嵐今夜の飯はジンギスカン
 紫陽花や風化激しき磨崖仏
 紫陽花の色の際立つ小糠雨

荒木 洋子

宗像

鎮魂碑囲む躑躅の花真白
 長閑けさや俳句の種を書き留むる
 *筈に掘立てといふぬくみかな
 風薫る少年牛を従へて
 カルデラに棚田百枚風薫る

池田 萩邨

倉掛

夏に入る庭の雑草湧くごとし
 大胆に肩出す少女街薄暑
 底なしの沼と知つてか水すまし
 *この坂のこの町が好き花橋
 泥舐めむばかりに這うて田草取

石川 豊子

舟入

薄暑はやおしやれな人の白い衿
 はつとする待合室の金魚かな
 一列に姉さんかぶり田植歌
 吹きながら子等のつかみしやぼん玉
 風光る今日も笑顔の老夫婦



七夕

同人

上二席以下は五十音順送り

山口 美智 選

※校庭にいつまでもゐる卒業子
花みかん島のチャイムはわらべ歌
父の日や粹なポロシャツさつそくに
新しき子の長靴が待つ梅雨入
山間の行きどころなき梅雨の雲

平野 幸輝
太田川

※鷹鳩と化すや知らせは子の受胎
※幾度も鏡を覗く新社員
鳥曇地誌に残りし開拓碑
ダリの絵の視覚混乱薄暑光
胸中に五人の先師沙羅の花

瀬崎 栄子
倉掛

咲き誇る牡丹に傘を持たせたり
風薫る一本道を我が家へと
※子供らがくるる花束こどもの日
夜明け前の音なき世界月おぼろ
瀬戸内は常におだやか春の波

重山 禮子
大柿

足元にじやれる子猫に話しかけ
しやばん玉の割れて虹色砕け散る
大胆に捌く漁師や初鯉
夏帽子少し浮かせて会釈かな
うつすらと父の残り香夏帽子

岳野 さゆり
宗像

タンデムに合はせる呼吸桜東風
三越のライオンに帯藍ゆかた
布張りの分厚き辞典風薫る
隣人は東京育ち初鯉
撮りためのビデオ鑑賞明易し

小野 康恵
木もれび

背を押す野ろの小径の風青し
乾燥の田畑潤す五月雨
傾ぎたる菜の杭補強梅雨晴間
大型の植田に残る車輪跡
栗田の水に映る町舎の燈涼し

辰原 富士子
安浦

春潮の上らんとする夫婦岩
夫の植ゑたる木より二三羽しじみ蝶
郭公の声する里や山深し
鳥影の深き色して卯月かな
老鶯の声極まれり山の家

故通堂 泰子
大柿

※そら豆を手のひらいつばいせんせいに
風一陣ほろ酔ふ妻の夏帽子
黒南風や空ふかしするミニバイク
穂高連峰の逆さに御座す代田かな
浜木綿や砂岩を穿つ波の音

渡邊 午水
太田川

※春の海演武の後の深き息
春風やアンパンマンの列車待つ
風薫る練習後のストレッツチ
阿字観の足の痛みや沙羅の花
監督を引き受けたるや雲の峰

世良 みか子
大柿

※花ミモザ少女の笑ひ声過ぐる
薄暑光脱ぎたる上着持て余す
四阿に池のきらめき蛙鳴く
火の山の裾野ひろびろ黒揚羽
傘と傘重なり合ひし梅雨の道

山本 清司
倉掛

退院や今日は青天春日傘
故郷は仮寝の宿よ蜚蜂
※古池や水面を走る蛇の首
老骨の溺るるばかり菖蒲の湯
風薫るスカート翻すテニス戦

野坂 辰夫
出江

共鳴句

(七夕欄)

山口 美智

校庭にいつまでもある卒業生

平野 幸輝

無事に卒業ができた安堵、新しい環境への期待や不安、友達との惜別の寂しさなど、さまざまな思いが交錯して、校庭を去りがたく、佇んでいる卒業生なのだ。

幾度も鏡を覗く新社員

瀬崎 栄子

新生活が始まり、環境の変化に慣れていく過程で、心身の不調をきたす症状である五月病。掲句の新社員も新しい環境になかなか馴染めず、不安な気持ちを落ち着かせるために、鏡をのぞいているのかもしれない。淡々とした表現の中に、人生の翳を映し出している作品。

子供らがくる花束こどもの日

重山 禮子

情に厚く、みんなの世話をし続けてきた、九十代半ばの作者に、子供達が感謝の意を込めて花束を贈ってくれたのである。

国民の祝日に関する法律では、こどもの日は「こどもの人格を重んじ、こどもの幸福をはかるとともに、母に感謝する」日である、となっているが、知っている人は少ないのではないだろうか。

夏帽子少し浮かせて会釈かな

岳野 さゆり

帽子を少し浮かせて挨拶をすませるのは、気のおけない間柄と思われる。作者は街中で会釈をしてすれ違う人を見て、

そう感じたのだろう。何気ない一こまを上手く切り取っている。

布張りの分厚き辞典風薫る

小野 康恵

布張りの分厚い辞典を開いたときの、紙の匂いと重量感に懐かしさを感じた作者は、指先でなぞるようにして、感触を確かめているのであろう。どこか古典的で夢幻的な香りのする作品。季語もとても良い働きをしている。

田の水に映る町舎の燈涼し

辰原 富士子

田んぼに水が張られた長閑な村の美しい風景が目に浮かぶ。遅くまで仕事をしている町舎の燈が映っている田で、これから始まる田植えへの期待感が伝わってくる。

古池や水面を走る蛇の首

野坂 辰夫

蛇は泳ぎが得意で、水面を蛇行しながらすいすいと泳ぐが、実際には蛇が泳ぐ姿はめったに見られない。経験豊かで好奇心旺盛な作者は、じつと観察していてその瞬間を捉えたのだらう。臨場感のある一句。

余所行きは病院通ひ更衣

小林 美枝子

年齢を重ねるにつれて、体力や気力が衰え外出が少なくなる。普段は着易い洋服で過ごす作者だが、病院に行くときには余所行きを着る。たまの外出でもある通院は、案外気晴らしになるのかもしれない。穏やかな身辺詠である。

莫逆の友に出会ひぬ入社式

大野のりこ

莫逆の友とは、心から信頼し合える友のこと。作者は入社式で、運命的な出会いをしたのだらう。仕事のこと、人間関係のことなど助け合いながら成長して行ける友に出会えたことは。人生の宝となることだろう。

花菜

十三席以下は五十音順送り

山口 美智 選



番台の姫は多弁桜咲く 岡田 玲子
※駅前をつらぬく軌道山笑ふ
猫カフェに長蛇の列や四月馬鹿
陶工の里新緑の色溢れをり
カタカナ語のあふるる駅や春たのし

酢漿草や脇役も良し人生は 佐々木 紀子
※霧雨やイマジンを聞く軽井沢

戦なき地に無言館小鳥来る
工場の人員整理残る菊
子宮から心音二つ朝顔の実

鯉釣りてリリースをする釣り名人 山下 明子
秋うらら釣り糸垂るる防波堤

※月の宴水面に揺るる石灯籠
野分立ち気もそぞろなる夕餉かな
アイロンで初挑戦の障子貼る

※おもむろに船頭唄ふ春の昼 安達 繁樹
湯けむりのたなびく春の夕べかな

車座の姫と翁水温む
突風に花冠離さず紋黄蝶
神木の千年楠の若葉かな

本家弘子
可部

もの芽や老の心を掻き立てり
髪切りてうなじかすむる初夏の風
植田水鏡となれる日暮かな
梅雨激し一夜川なる谷の水
夏草や家跡覆ひ天下取る

櫻田文雄
八幡川

肥後は阿蘇火の山燃やす彼岸花
手影絵の親子のきつね月の宴
水澄むや足跡しかと雅文翁
神宿る巨樹の自讃や銀杏散る
霜降の時折正す猫背かな

隠木登美子
舟人

溪流の匂ひ来るやう木の芽風
葉桜のはだら眩しき午後の径
獨りてふ時もて余す端居かな
若人の燃ゆるにも似て夾竹桃
刻刻と変はる万象夏の果

石丸恭子
可部

鳩来たり何やらつつく春の庭
祖母の植ゑし白き牡丹のたたずまひ
日ぐすりの効かぬ痛みや新茶汲む
退院の日の満開のさつきかな
千回のありがとうのち雨あがる

永富奈生
出江

水温む明るめの紅さしてみる
満開の桜とけゆく曇り空
玄海の波はる風に宥められ
登坂車線合飲の花また合飲の花
曾祖父の松に風蘭やどりたり

今田脩三
ゆずり葉

句を詠むも詩を書くもよし星月夜
我が思ひ風に託すや墓参り
十五夜の明かりに回す洗濯機
我が肩にこれも仏か大蜻蛉
もの思ふ秋は心の肥やしかな

中村洋子
舟入

アポロンの滂沱の涙ヒヤシンス
武者人形面頬怖いと泣くをさな
目借時メモに這ひたる蚯蚓文字
母の宿茅花流しの先にあり
K2に果つる勇者や星月夜

秦純子
寿

先達の札の一枚遍路道
入学の祝に添ふる一筆箋
酒蔵の迷路をぬけて返り花
春の夢母と訪ぬる島の宿
友と行く武家屋敷なる落椿

共鳴句

(花菜欄)

山口 美智

駅前をつらぬく軌道山笑ふ

岡田 玲子

八月三日(日)路面電車が駅の二階に乗り入れる、駅前大橋ルートが開業することを、みな楽しみに待っている。山々の木々が芽吹き、あらゆるものが活気づく春の季語「山笑ふ」が、広島のさらなる発展を暗示しているようだ。

霧雨やイマジンを聞く軽井沢

佐々木紀子

歴史的、経済的、政治的などさまざまな要因が複雑に絡み合い、世界中で起きている武力紛争に心を痛めている作者、平和な世界が訪れることを希求しつつづけていた、ジョンレノンの「イマジンを聞いています」である。季語の霧雨が、混沌として先が見えない世界情勢を表しているようにも思える。

月の宴水面に揺るる石灯籠

山下 明子

石灯籠は、伝統的な日本の照明の一つで、趣のある日本庭園には欠かせないものである。水面に揺れる月と、石灯籠が醸し出す幻想的な雰囲気、作者は魅了されたのである。

おもむろに船頭歌ふ春の昼

安達 繁樹

北原白秋の詩集「思ひ出」にもうたわれた、白秋ゆかりの柳川のお堀巡りを思い出した。船頭の巧みな竿さばきや軽快な語りや舟唄、満開の桜を楽しみながらの川下り、忘れられ

ない旅になったことだろう。

ものの芽や老の心を掻き立てり

本家 弘子

春の日差しを受け膨らんでゆく、諸々の草木の生命力に触発されて、老いて湿りがちだった作者の心に、氣力が湧いてきたのだ。

手影絵の親子のきつね月の宴

櫻田 文雄

特別な道具は必要なく、月さえあればどこでも楽しめる手影絵。月の光の変化が、手影遊びをさらにロマンチックなものにしてくれる。中七の「親子のきつね」という具体的な描写で、臨場感のある句になった。

独りてふ時もて余す端居かな

隠木登美子

私の周りにも独り暮らしの人が増えている。色々な習いものをする反面、どうしようもない寂しさに襲われることもあるという。ほんやりと縁側で涼んでいると、ふと自分だけ取り残されているように感じたのかもしれない。

満開の桜とけゆく曇り空

永富 奈生

満開の桜が、養花天(桜が咲くころの穏やかな曇り空)に溶け込んでいくように感じたという、研ぎ澄まされた感性と無駄のない表現に、作者独自の世界観が感じられる。

十五夜の明かりに回す洗濯機

今山 脩三

夜のうちに洗濯をする「夜濯ぎ」という夏の季語もあるが、仕事や生活様式の変化で、夜に洗濯する人が増えているらしい。

一年の内で最も美しく見える月を眺めながらの洗濯である。一日の疲れもきつと、洗い流されたことだろう。